

ヴァルラン・ル・コントあるいは新しい演劇のために

——17世紀フランス演劇史序説——

(その6)

戸 口 民 也

第5章 1598年—1600年 パリ——定着をめざして

4 再度の提携と破綻

前回ふれたように、ヴァルランたちは1598年6月から7月にかけてパリで上演を行っていた⁽¹⁾。しかし、その後は1599年1月まで、ヴァルランの消息はつかめない。パリで演じていたか、それとも地方を旅していたか、全く不明である。

ところで、1598年の終わりに、先に紹介したイギリス人一座とはまた別の劇団がパリに現われる。しかも、いっぺんに二つの劇団が現われたのである。そのうちの一つは、俳優の名前も人数もわからず、ただ「バステューユの宿屋」*maison et hôtellerie de la Bastille* に陣取って芝居を演じていた（あるいは演じようとしていた）ので、例によって受難劇協会が上演差し止めを計ったことが確認されるのみである⁽²⁾。

もう一つ劇団についてはもう少し具体的なことがわかっている。というのも、協会がこの劇団に対して契約遵守を求めた催告状（1598年12月21日付）が残っているからだ⁽³⁾。文書によると、座長はブノワ・プティ *Benoist Petit*、そしてほかにはバルテルミー・マルタン *Barthélemy Martin*、ヴェスパジアン・ブロスロン *Vespazien Brosseron*、ジャン・クールタン *Jehan Courtin*、ロバール・ゲラン *Robert Guérin* などの名前があがっている。協会は彼らに、契約で決められた日に「物語や劇」*le roman et le jeu* を演じるよう迫っている。ということは、どうやら彼らは、先にイギリス人劇団がしたのと同じような契約を結んだようだ。収益は協会と折半する、つまり最初に上演した日の収益は劇団側が取り、次に日のは協会が取る、そしてあとは同じようにして1日分の収益を交互に取ってゆくということである⁽⁴⁾。ところがプティたちは、協会が入場収益を取る

番の日に演じなかった。そこで、協会が対抗措置を取ったのだろう。

プティとその仲間たちがいつごろパリに現われたかはわからないが、この催告の日付からしばらく前ぐらいと置いてよいだろう。ところで、「物語や劇」という記述には多少気になるところがある。「その3」で紹介したヴァルランとタルミーの協定書では「喜劇、悲劇、悲喜劇、牧歌劇およびその他の演物」⁽⁵⁾というふうにルネサンス以降の新しいジャンルの劇が具体的に記されていたのと較べると、むしろ中世風の劇を連想したくなってくる。受難劇協会が主導権をにぎって演目に注文を出したのかもしれないが、プティ一座自体も中世風の芝居をレパートリーとしていたのだろう。

ここで少し脇道にそれるが、二つほどコメントしておきたい。

一つはブノワ・プティとヴェスパジアン・ブロスロンの二人についてである。彼らはここでは俳優として登場しているが、1600年10月30日付の文書⁽⁶⁾では受難劇協会側に名を連ねている。彼らの経歴はよくわからないが、協会員になる以上、たぶんパリのブルジョワ出身であろう。すでに「その2」でも述べたとおり、以前は協会員自身が劇を上演していた。素人の集団であったから、演技その他上演の面ではたしかに未熟だったかも知れない。とはいえ、芝居好きが集まっていただろうし、なかには芝居に熱中しすぎてそちらを本業にしてしまった者もいたかもしれない。プティやブロスロンもことによったら似たようなケースで、一度は役者になったが、後に芝居から足を洗い、普通の「ブルジョワ」の生活に戻ったと考えたらどうだろう。もっともこれはあくまでわたしの勝手な想像にすぎないのだが。なおついでに付け加えておくと、1598年にヴァルランの一座に加わっていた（またこれからあともしばらくはヴァルランとの関係が続くことになる）フィアークル・ブーシェ Fiacre Bouchet も、1607年10月24日付の文書では、ヴェスパジアン・ブロスロンとともに「元協会員」entiens maitres(sic)として名前が記されている⁽⁷⁾。

もう一つはロベール・ゲランについてである。むしろグロ・ギヨーム Gros Guillaume といったほうが早いだろう。やがて一座の座長となり、またゴージェ・エ・ガルギーユ Gaultier Garguille（本名ユージュ・ゲリュ Hugues Guéru）、テュルリュパン Turlupin（本名アンリ・ルグラン Henri Legrand）とともに17世紀

初めのパリで大当たりをとった笑劇 farce 三人組の一人である。現在知られているかぎりでは、ロベール・ゲランの名前がはっきり記録にあらわれるのは、この文書が最初である。この時彼はブノワ・プティの一座に加わっていたが、あとで述べるように、1ヵ月もたたぬうちにヴァルランと係わりをもつようになる。それ以前のことはわからないが、少なくともその後は、ある時はヴァルランの一座と提携し、またある時はヴァルランの一座の座員となったりもする。しかし、彼とヴァルランとの関係は一定の距離を置いたものだったようで、結局はヴァルランとは別の道を歩くことになる。いずれにせよ、この先ロベール・ゲランの名前が登場する機会は何度もでてくることは確かである。しかし、今はこのくらいにとどめておこう。

さて、話を本筋に戻すことにしよう。プティ一座はオテル・ド・ブルゴーニュ座で芝居をはじめはしたものの、催告状にあるように、受難劇協会との契約を真面目に守らなかった。協会と劇団とのいさかいがどう決着したかは記録がないが、たぶん劇団側がこのときは引き下がったのだろう。というのもプティ一座はそれから約2週間後の1599年1月4日に、オテル・ド・ブルゴーニュ座で演じる契約を改めて結んでいるからである⁽⁸⁾。ただしそれは単独ではなく、ヴァルラン・ル・コントと提携して上演するということだった。問題の契約の状況と内容のみてみたい。

前年の7月以降からヴァルランがどこにいたのかは、冒頭に書いたようにまったくわからない。それはともかく、ヴァルランは1599年1月4日にパリでプティ一座との提携に合意した。その理由は何だろう？ デイエルコーフ・オルスポエル夫人は次のように述べている。「(1599年に)最初にパリに現われたのはまたもやヴァルラン・ル・コントである。彼はすぐにブノワ・プティと交渉にかかり、二つの劇団が一緒にオテル・ド・ブルゴーニュ座で演じるようプティを説得した。受難劇協会は彼らに前年と同じ条件を要求する。つまり劇の収益は劇団と協会とが交互に取る、ということである。」⁽⁹⁾

なお、デイエルコーフ・オルスポエル夫人は *Vie d'Alexandre Hardy*⁽¹⁰⁾ では次のように推測していた。ヴァルランもプティも、座員に去られて困っていた。プティ一座が1598年12月21日に協会の催告を突き付けられたのは恐らく劇団員の

何人かが去ってしまったため上演が不可能になったからで、それでちょうど都合よくパリにやってきたヴァルランたちに助けを求めたのだろう。またヴァルランにしてもタルミーとの提携が破綻して座員不足に悩んでいた。それで、双方の利害が一致し、提携に至ったのである、と。ただ、この推測にはいくつか問題がある。

まず第一にプティの側のことである。確かに役者たちの離合集散はよくあることで、ヴァルランもそれには散々悩まされた。すでにタルミーとの提携とその破綻については「その3」から「その5」にかけて取り上げてきたし、別の例も一まさに今問題になっているプティとの提携をはじめとして—この後たびたび紹介されるはずだ。だから、プティが座員に去られたということは、ありえないことでは決してない。けれども、具体的な証拠は何一つなく、全くの推測に過ぎない。それに、プティ一座が役者不足に深刻に悩んでいたとは思にくい。例えば彼らは催告状をみてもすでにブノワ・プティ、バルテルミー・マルタン、ヴェスパジャン・ブロスロン、ジャン・クールタン、ロベール・ゲランの5人の名前が記されていたが、1599年1月16日付の文書⁽¹¹⁾ではさらにもう一人セバスチャン・ガナン Sebastien Ganin の名前も加わっている。6人というのは多いとはいえないまでも、少なすぎて芝居さえできないという数では必ずしもないのである。だから、彼らが協会との契約を守らなかったのは、もっと別の理由、それもおそらくは金銭的な理由（それに加えて協会のために「ただ働き」するのは腹立たしいという思い）によるものだったろうと私は考えている。

第二にヴァルランの側の理由についてもやはり問題がある。デイエルコーフ・オルスポエル夫人は、ヴァルランの座員不足は「タルミーとその座員たちが1598年3月16日の提携協約の破棄を考え、袂を分かとうとしていた」⁽¹²⁾から、と推測しているが、ヴァルランとタルミーとの提携が破綻したのはもっとずっと早い時期、つまり1598年3月17日の判決が出されてまもないころだったと思われる⁽¹³⁾。だから、時間的なずれを考えると、デイエルコーフ・オルスポエル夫人の推測には無理があるようだ。

念のために付け加えれば、デイエルコーフ・オルスポエル夫人は、今私が批判したような推測は *Le Théâtre de l'Hôtel de Bourgogne* には全く書いていない。根拠が薄弱であると考え撤回したのだろうか。このほかにも、同じ事柄にふ

れていながら、*Vie d'Alexandre Hardy* には書かれているのに *Le Théâtre de l'Hôtel de Bourgogne* では全く言及されていないことはいくつもある（「全く言及されていない」というのは、前者で述べられていたことと矛盾する事柄—あるいは矛盾ではないにしても後者で言及があってしかるべきと思われる事柄—について、後者では肯定も否定もせず、確認も訂正も一切しないまま、いわば黙殺状態になっている、ということである）。例えば前回「その5」で訂正したこと⁽¹⁴⁾などがそうである。興味のある方は二つの本を詳しく読み較べていただきたい⁽¹⁵⁾。

ただし、ヴァルランもプティも、座員の数があり余るほどいたわけでは決してない。決定的に不足とまではいえないけれども、はっきり言って、むしろ足りないくらいだった。それは後述する契約条件を読めばわかる。

さて両者の提携だが、ヴァルランの側はともかく、プティはむしろ消極的であったと思われる。その理由は後で詳しく述べるつもりであるが、それでは一体誰がこの提携を望んだのか？ 私の想像ではこうである。

受難劇協会はオテル・ド・ブルゴーニュ座をできるだけ有利な条件で貸す相手を探していた。プティ一座がすでにパリにきていて協会と契約をしていたが、契約をきちんと守らず、催告状まで出す始末であった。そこにヴァルランの一座が再びパリにやってきた。協会はプティにだけ劇場を貸すよりも、この際はヴァルランにも貸したほうが得策と考えた。ヴァルランはすでに半年前にパリにきている「おなじみ」だし、1592年の時点でもボルドー高等法院の評定官ジャン・ド・ゴーフルトーが「著名な俳優」と記していた役者である⁽¹⁶⁾。契約を守らぬプティにいささか手を焼いていただけでなく、名の売れたヴァルランが別の場所で芝居をはじめたら、オテル・ド・ブルゴーニュ座にとっては脅威ともなりかねない。少なくとも客足になんらかの影響を及ぼさずにはおかないだろう。そこで、ヴァルランとプティの提携を歓迎した、ということだ。実際に、いくらプティがヴァルランとの提携を求めたとしても、受難劇協会がそれを全く望まなかったなら、提携自体が成立しなかっただろう。プティ一座がすでに契約不履行という問題を起こしている以上、協会はプティとの契約を見直すこともできたはずだからである。またプティ一座も、おそらくはあまり乗り気ではなかったが、危険が多い競争よりは、妥協を選んだ。ヴァルランに対してだけでなく、受難劇協会の意向に

対しても、とりあえずは逆らわないでおくほうを選んだのである。

以上が私の推測だが、ともあれ、プティはヴァルランと提携する。その内容は次のとおりである。

- 1, プティとその一座は、ヴァルランとその一座がオテル・ド・ブルゴーニュ座で、「今日から次の四旬節前日まで」 du jour d'huy jusques au jour de caresme prenant prochain, 自分たちと交互に1週間ずつ上演することに同意する。(Carême prenant は四旬節 carême が始まる前の3日間を言うが、とくに四旬節最初の日である灰の水曜日 mercredi des cendres の前日の mardi gras をさすことが多い。ここでも le jour de carême prenant とされているので、mardi gras のことと考えてよい。)
- 2, ヴァルランの一座がまず今日から次の日曜日まで1週間上演する。(「今日」というのは1599年1月4日で、この日は月曜日だった。つまりヴァルランは1月4日の月曜から10日の日曜まで演じるわけである。)
- 3, 上演収益は、ヴァルラン一座のためと決められた日のもは一座の収入となるが、ヴァルランは受難劇協会のためと決められた日(収益は協会のものになる)にも上演しなければならない。
- 4, 次の第2週目(つまり1月11日の月曜日から17日の日曜日まで)はプティ一座が上演する。プティも協会のための日に演じなければならない。
- 5, 双方は、相手側の上演日における劇および収益に関しては一切かかわらない。
- 6, 劇の収益はそれを演じる劇団が自ら徴収するものとし、それ以外の方法は取らない。(わざわざこうした文言が記されている理由は何か? この協定は確かにヴァルランとプティとの間で交わされたものである。だから直接的には、双方とも相手側の上演に関しては、劇の内容についても入場料の徴収についても手出し・口出しはしない、という意味だろう。しかし、本当にそれだけだろうか? 私の深読みかも知れないが、受難劇協会の介入を極力排除しようとする意図が、この文言から読み取れないだろうか?)
- 7, 以上のようにしてヴァルランとプティは1週間ずつ交互に上演して行く。
- 8, ただしヴァルラン一座は、「日曜日を2回使って」 par deux jours de

dimanche, すでにプティ一座が演じ始めている「物語」 roman を演じるものとする。(と言うことは、ヴァルランは自分たちの上演週である1月10日と24日の日曜日2回を犠牲にしてプティの「物語」を演じるのだろうか? それともプティ一座が、彼らの日曜日2回つまり1月17日と24日の上演をヴァルラン一座に委ねることにしたのだろうか?あるいはまた、それぞれ日曜を1回ずつ提供しあうことにしたのだろうか? おそらく2番目か3番目の方法で合意されたはずである。というのも、後述するように、1月17日は、ヴァルランが「物語」を演じる予定になっていたことが文書によって確認されているからである。)

- 9, なおそのために、プティは物語の台本をヴァルランに提供し、またヴァルランがそれらの物語および他の劇を演じるのを手伝うために、必要な場合には座員の一部をヴァルランに提供するものとする。
 - 10, ヴァルランも、プティがそれらの劇を演じるのを手伝うために、必要な場合には座員の一部を提供する。
 - 11, さらにヴァルランは、プティ一座が上演する日に「衣装」 habitz と「音楽」 musique et jeu de violles を提供し、また座員と共に「笑劇」 farce を演じるものとする。なおプティはその代価としてヴァルランに「2エキュ40ソル(トゥール貨)」 deux escuz quarente solz tournoiz を、音楽・笑劇・衣装を提供される日に支払う。
 - 12, 費用の内訳は、衣装と音楽が「1エキュ・ソレイユ40ソル」 ung escu soleil quarente solz tournoiz, 笑劇が「1エキュ・ソレイユ」で、この額は劇が演じられる毎に、上演後ヴァルランに支払われる。ただしプティは、ヴァルランが笑劇を演じると記す以外は、ヴァルランの名前を掲示には一切のせない。
 - 13, 次の水曜日は受難劇協会のために演じる日で、プティとヴァルランの両方の劇団が「物語」を上演する。(この上演は、8で言われている「日曜日を2回使って」というのとは別であろう。日曜日2回はヴァルラン一座が単独で演じることになっているからである。ただし「必要な場合には」プティ一座の座員も協力するという条件がついてはいるが。)
- 以上、提携契約の内容を見てみたが、残念ながらヴァルラン一座の顔ぶれを知

る手がかりは全くない。座員の人数も名前も契約書には書かれていないからである。前年にヴァルランと共にいたサヴィニアン・ボニー Savinien Bony やフィアークル・ブーシェ Fiacre Bouchet はこの時も一緒だったろうか？ ボニーについてはわからない⁽¹⁷⁾。ただ、少なくともブーシェは一緒だったと思われる。というのも、ブーシェはこの年つまり1599年の4月21日にオテル・ド・ブルゴーニュ座の loge (楽屋それともボックス席?) を一つ借りる契約をしているし⁽¹⁸⁾、1600年1月26日付の文書⁽¹⁹⁾にはヴァルランとともに名前が記されている(ただし本文中に名前が上げられているだけで、文書の最後にはヴァルランの署名はあるがブーシェの署名はない)。また、1600年6月19日付の未公開文書⁽²⁰⁾でもヴァルランとブーシェが二人とも加わっている(こちらには二人とも署名している)。こうした状況から考えると今問題にしている1599年1月の時点でもブーシェがヴァルランと行動を共にしていた可能性は非常に高いといえるだろう。

ヴァルラン一座の座員についてはこれ以上述べることはできないが、それとは別に一つだけ付け加えておきたい。文書の冒頭に、ヴァルランは「パリは聖ソヴール小教区モントルグイユ通りに住む(滞在する)」demeurant à Paris rue Montorgueil paroisse Saint Sauveur と記されている⁽²¹⁾。モントルグイユ通りは今日もそのままの名前で残っている通りで、オテル・ド・ブルゴーニュ座からはそう遠くないところにある。「その3」で取り上げた1598年3月16日付の文書(アドリアン・タルミーとの提携文書)に記されていた住所「メルデ通り」rue Merdet⁽²²⁾は聖ウスターシュ小教区 paroisse Saint Eustache にあったが、それよりも北になる。劇場にも多分少しだけ遠くなっているが、それにしてもそうたいした距離ではない。地の利は悪くないところと言ってよいだろう。

さて提携の内容に戻るが、上に紹介したところからも、ヴァルランとプティが前年のイギリス人劇団と同じような契約条件でオテル・ド・ブルゴーニュ座を借りたことがわかる。と言うことは、ヴァルランと提携する以前のプティ一座もやはり同じ条件で受難劇協会と契約を結んでいたと考えて差しつかえあるまい。違いがあるとすれば、単独で劇場を借りるかあるいは二つの劇団で諸条件を折半する形で借りるかということに過ぎない。つまり、ヴァルランとプティは一週間ずつ交代で劇場を使うことにし、受難劇協会用の日(収益は協会の取り分となる日)の芝居もそれぞれが上演する週ごとに設定されている、ということだ。

ただ、劇場の契約条件とは別に、いくつか興味深い点がある。個条書きにまとめると次のようになる。

- 1, プティ一座がすでに演じ始めていた「物語」をヴァルラン一座も引き続き上演する(条件8)。これについては後で詳しく述べることにする。
- 2, ヴァルランとプティは、「必要な場合には」それぞれ座員を融通しあう(条件9, 10)。つまり、どちらも座員の数は十分とはいえなかったが、「必要な場合には」という但し書きがあるように、決定的に不足していたわけでもなかった。
- 3, 衣装と音楽はヴァルランの側で受け持つ(条件11)。タルミーとの提携でも同じだった。
- 4, ヴァルランはプティ一座のために笑劇を演じる(条件11)。この点については今から少し述べることにしよう。

ヴァルラン一座のレパートリーは、すでに述べたように、タルミーとの提携協約には「喜劇・悲劇・悲喜劇・牧歌劇およびその他の演物」と記されていた。「その他の演物」というのは笑劇を指していたに違いない。そのことは、ジャン・ド・ゴフルトの次の記述からも明らかである。「この年(1592年)、著名なフランス人俳優ヴァルランがボルドーを訪れ、悲劇や笑劇を数多く演じて観客から大いにもてはやされた。」⁽²³⁾

ヴァルランは悲劇・悲喜劇・牧歌劇といったジャンルだけでなく、喜劇さらには笑劇でもすぐれた演技をみせていた。彼が笑劇を得意としていたこと、また即興にも名人芸を發揮していたことは、まさに今問題にしている1599年にパリを訪れたトーマス・ブラッター(息子の方)の『パリ描写』⁽²⁴⁾にも記されているが、詳しくは次回に取り上げることにしたい。いずれにせよ、ヴァルランの笑劇が客を集める有力な武器であったことは、受難劇協会もブノワ・プティも認めていたに違いない。それが提携契約にも反映されているわけである。

ところで条件8についてはどうか？ つまりプティ一座がすでに演じ始めていた「物語」をヴァルラン一座も引き続き上演するというところである。ここから一体何を読み取ったらよいのだろうか？ 可能性は二つある。

- 1, この「物語」は中世の聖史劇のように上演に何日もかかる作品だった。そして、終わるまでまだ何回か上演しなければならなかった。それで、途中で打ち切らずに最後まで演じたいとプティが（あるいは受難劇協会が—あるいはまた受難劇協会もプティも）望んだ。
- 2, この「物語」自体は一回の上演で終わる芝居だった。しかし、何らかの理由でプティが（あるいは受難劇協会が—あるいはまた受難劇協会もプティも）、ヴァルラン一座でもこの「物語」を上演することを望んだ。

私としては、おそらく1の理由だったと思う。2の可能性もあるだろうが、その場合には「何らかの理由」というよりは「理由は全くわからないが」と言い換えるほかない。ところでこの「物語」は客に受けていたのだろうか？ 大成功を取っていたとは決して言えないだろう。もしも大当たりをとっていたとしたら、仮に受難劇協会が望んだとしても、プティがヴァルランに自分の大切な収入源を簡単に提供するはずがないからである。それにこの提携は、受難劇協会の意向も大きく関与していたに違いないと私は推測してはいるが、形の上ではあくまでプティとヴァルランとのあいだで結ばれたものである。だから、プティが自分に不利になるとわかり切っているようなことを進んで約束するはずはないのだ。

一つだけほとんど確実に言えそうなことがある。それはこうだ。問題の「物語」が何日もかかる長いものであったか否かはともかく、またそれが客に受けていたかどうかとも別に、プティはもともとこの提携には気が進まなかった。しかし結局はヴァルランと提携してしまった。ヴァルランからの熱心な申し入れがあったのか、それとも受難劇協会の強い意向があったのか、あるいはこのままでは自分たちの公演がジリ貧になってしまうという危機感を抱いたからか、理由は確定できない。だが、プティが心ならずも提携に同意したことは間違いなさそうである。というのも、この提携はあっさりと破綻してしまうからである。それもどちらかといえば、プティの方に原因があったといえるからだ。そのいきさつについてこれから説明しよう。

1599年1月16日（土曜日）、つまり提携を結んでから2週間もたたぬ時期に、ヴァルランはブノワ・プティとその一座に対して「申し立て」を行なっている⁽²⁵⁾。主な内容は次のとおりである。

- 1, ヴァルランは、明日から来週1週間、今月の24日⁽²⁶⁾の日曜日までの間、今月の4日に結んだ契約に基づき、オテル・ド・ブルゴーニュ座で演じるつもりであり、またそうしたいとも思っている。
- 2, だが明日は、「物語」に代えて悲劇を演じようと思っている。なぜなら、プティが台本を提供しないため、台詞を覚えられないからである。

なおこの後には、欄外の書き入れ（次の3にあげる内容）とともに、文意がつかみにくい記述（おそらく4のような意味であろう）が続いている。

- 3, しかしながら、ヴァルランはその「物語」を、明日の代わりに今月23日の日曜日(sic)に演じることを提案する。（あくまでこれは欄外の書き入れなので、本文がすべて書かれた後から、ヴァルランが譲歩の意味で申し出たことも知れない。その場合はむしろ、最後におかれるべきものというふうを受けとめたほうがよいだろう。）
- 4, ヴァルランの訴えによれば、自分としては分別をもって行動するつもりであるのだが、プティらは明日と来週一週間の上演をなにがなんでも妨害しようとするかも知れない。（先にも言ったように、この部分は非常に意味がとりにくい文章になっている。原資料と対比させながら何度も読み直してみるのだが、語法も単語と単語とのかかわりも文の切れ目もすべてあいまいなので、この意味でよいとは断言できない。）

「申し立て」はさらに次のように続く。（なお、以下の文章も文の切れ目がはっきりせず、原資料と対比させてもつながり具合がよくわからないため、たぶんこういった意味であろうとしか言えない。あらかじめお断りしておく。）

- 5, 一方プティは、契約があるのだからヴァルランは物語を2日間演じる義務がある、と反論する。
- 6, ヴァルランは、証人をまえにして、この契約からは手を引くという。
- 7, しかしプティは、もしもよければ明日ヴァルランに物語を演じてほしいと強く求める。

8、だがヴァルランは、前に述べたことを繰り返し主張する。

以上のような具合で、結局はお互いに平行線をたどったまま、「申し立て」は終わっている。なおこの文書の冒頭と末尾には次のような記述があることも付け加えておこう。まず冒頭には「下に署名せるパリはシャトレ裁判所の国王陛下の公証人（複数）」が「ヴァルラン・ル・コントのもとに、（ヴァルランと）ともにおもむいた」les notaires du Roy nostre Sire au Chatelet de Paris soubsignez se sont transportez a et avec Valleran le Conte... ということが記されている。彼らが赴いた場所はオテル・ド・ブルゴーニュ座で、実際にこのすぐ後にそのことが書かれている。また文書の最後も「オテル・ド・ブルゴーニュ座にて、1599年1月16日土曜日午後」と締めくくられている。つまり、公証人たちは、ヴァルランの要請に従ってオテル・ド・ブルゴーニュ座まで足を運び、そこでヴァルランの訴えとまたプティの主張も聞いたうえで、この「申し立て書」を作成した、という訳である。

それではここから何を読み取ったらよいのだろうか？ たとえば次のようには考えられないだろうか？

ヴァルランはこの提携に強い意気込みを抱いていた。だから、プティたちが後生大事に抱え込んでいる時代遅れの「物語」を演じることに同意したし（ヴァルラン一座のレパトリーはもっと新しいジャンルのもの、つまり悲劇・喜劇・悲喜劇・牧歌劇を主に構成されている）、その上自分の得意とする笑劇をプティ一座のためにも演じることも承知した。（もちろん、それ相当の代価を要求してはいるが。）これらを考えると、ヴァルランの方が提携に積極的であったし、そのぶん譲歩もしていたとみてよいだろう。ヴァルランは契約を誠実に実行するつもりでいた。しかしプティの方は「物語」の台本を出し渋り、ヴァルランが何回催促しても渡そうとしない。そのために、ヴァルランたちは稽古すらできない状態になってしまった。怒ったヴァルランは公証人を連れてきて、もうこんな契約はご破算だと主張する・・・

それでは何故プティたちはヴァルランに台本を渡すのをためらったのか？ いくつかが可能性が考えられる。

- 1、自分たちにとっては得意の演目を競争相手（それもおそらくは強すぎる競争相手）にとられなくなかった。自分たちのおかぶを奪われるのがいやだった。（もっともヴァルランはそれほど興味がなかっただろうが・・・）
- 2、ヴァルランが演じる悲劇や喜劇に較べると、自分たちの台本がお粗末に感じられたので、その意味で手の内を知られなくなかった。
- 3、ヴァルラン一座と何らかの理由で対立し、関係がこじれた。

いずれも根拠を欠いたままの想像にすぎないが、ともあれ、プティたちが本当にヴァルランとの提携を望んでいたのなら、こういう事態に——しかもこれほど早く——おちいることはなかっただろう。

ヴァルランにとって二度目の提携もこうして行き詰まってしまった。文書そのものには結末がどうなったかは記されていないが、たぶん、このまま破綻してしまっただろう。だとすればあまりにもあっけない幕切れだが、それぞれのレパトリーから見ても長続きする関係は期待しようがなかったといえる。

しかし、1599年という年は、ヴァルランのパリでの活動について、ある程度の資料が残されている年ではある。それについては次回に述べることにしたい。

（続く）

註

(1) 本研究のこれまでの掲載誌および構成は次のとおりである。

「ヴァルラン・ル・コントあるいは新しい演劇のために——17世紀フランス演劇史序説（その1）」（17世紀仏演劇研究会「エイコス」第2号、1980年、pp.1-23.）

序

第1章 1592年 ボルドー

第2章 1593年 フランクフルト ストラスブール

第3章 16世紀後半におけるフランスの演劇状況について

「同（その2）」（長崎外国語短期大学「論叢」第28号、1985年、pp.1-14.）

第4章 パリをめざして——受難劇協会とオテル・ド・ブルゴーニュ座

「同（その3）」（長崎外国語短期大学「論叢」第29号、1986年、pp.1-17.）

第5章 1598年-1600年 パリ——定着をめざして

1. タルミーとの提携

「同(その4)」(長崎外国語短期大学「論叢」第31号, 1988年, pp.1-18.)

第5章 1598年-1600年 パリ——定着をめざして

2. イギリス劇団の出現とその波紋——オテル・ド・ブルゴーニュ座の使用条件をめぐる

「同(その5)」(長崎外国語短期大学「論叢」第37号, 1991年, pp.1-17.)

第5章 1598年-1600年 パリ——定着をめざして

本論にはいる前に——日付の間違いと訂正

3. 長い戦いの始まり

(2) "1598.15 décembre.—Procès-verbal de Patelle, huissier en la Cour, de la visite par lui faite en la maison et hôtellerie de la Bastille, près l'église Saint-Paul, en laquelle étoient logés des comédiens, auquel lieu il auroit fait les défenses y mentionnés." (Eudore Soulié, *Recherches sur Molière et sur sa famille*, Paris, Hachette, 1863, p.153.)

Voir aussi S. Wilma Deierkauf-Holsboer, *Le Théâtre de l'Hôtel de Bourgogne, Tome I*, Paris, Nizet, 1968, p.45.

(3) Cf. Deierkauf-Holsboer, *Vie d'Alexandre Hardy*, Paris, Nizet, 1972, pp. 48-49 et Appendice N°4 "Somme des Confrères de la Passion à Benoist Petit et sa compagnie" (p.175).

Voir aussi Deierkauf-Holsboer, *Le Théâtre de l'Hôtel de Bourgogne I*, pp.45-46.

(4) イギリス人劇団が受難劇協会と結んだ契約については、詳しくは「その4」pp.3-8を参照。

(5) 「その3」p.5を参照。

(6) Cf. Deierkauf-Holsboer, *Le Théâtre de l'Hôtel de Bourgogne I*, Appendice N°6, pp.177-178. "Un accord conclu entre les Maîtres de la Confrérie de la Passion et les comédiens français" du 30 octobre 1600.

(7) Cf. Deierkauf-Holsboer, *Le Théâtre de l'Hôtel de Bourgogne I*, Appendice N°12, pp.183-185. "Second accord entre les Maîtres et les anciens Maîtres

au sujet des loges réservées" du 24 octobre 1607.

(8) Cf. Deierkauf-Holsboer, *Vie d'Alexandre Hardy*, Appendice N°5, pp.175-177. "Accord entre Valleran le Conte, comédien du roi, et sa troupe, et Benoist Petit, comédien français, et sa troupe".

(9) Cf. Deierkauf-Holsboer, *Le Théâtre de l'Hôtel de Bourgogne I*, p.47.

(10) p.49.

(11) Cf. Deierkauf-Holsboer, *Vie d'Alexandre Hardy*, Appendice N°7, pp.177-178. "Déclaration de Valleran le Conte et sa compagnie à Benoist Petit et sa compagnie".

(12) *Vie d'Alexandre Hardy*, p.49.

(13) 「その5」p.4を参照。

(14) 「その5」pp.1-3を参照。また拙稿「17世紀フランス演劇史研究ノート—1598年パリ：古文書の読み違いをめぐる」(17世紀仏演劇研究会「エイコス」第6号, 1990年, pp.67-77も参照されたい。

(15) 念のために付け加えておきたい。出版年代だけ見ると、*Le Théâtre de l'Hôtel de Bourgogne I*が1968年刊であるのに対し、*Vie d'Alexandre Hardy* (nouvelle édition revue et augmentée)は1972年に刊行されている。つまり、*Vie d'Alexandre Hardy* (改訂版)の方が後に出版されているわけである。しかし双方を読み較べてみると、そういうふうには見えない。旧版を持っていないので比較することはできずにいるが、*Vie d'Alexandre Hardy* (改訂版)は、「改訂版」と銘打ちながら、十分な改訂を経ずに旧版のまま放置されているところが多いのではないか。*Hôtel de Bourgogne I*と読み較べると、その感を強く抱かずにはられない。恐らく(というのも著者自身は何も語っていないので私が勝手に推測していることなのだが)著者は*Alexandre Hardy*の改訂版出版にあたって、*Hôtel de Bourgogne I*で書いたこと、とくに*Alexandre Hardy*の旧版とは食い違う点(新たな発見や修正事項も含めて)を比較対照しながら厳密に「改訂」を行なうのを怠ったのではないか?

(16) 「その1」p.4を参照。

(17) 本稿連載の過程でいずれ述べることになるはずだが、ボニーとヴァルランとの関係はかなり後まで続く。この時点でもおそらくボニーはヴァルランと一緒にだったと思うが、確証はない。

- (18) Cf. Eudore Soulier, *Recherches sur Molière et sur sa famille*, pp.153-154.
- (19) Cf. Deierkauf-Holsboer, *Vie d'Alexandre Hardy*, Appendice N° 14, pp. 182-183. "Consentement fait par Valleran le Conte aux comédiens Robert Guérin, Vasparail (sic) Brosseron et Nicolas Revailon".
- (20) Archives Nationales, Minutier Central, XV,9. 186V°-187R°etV°-188R°.
- (21) なおプティはタンブル通り rue Temple に住む（滞在する）と記されている。
- (22) メルデ通りについては「その3」の註5を参照。
- (23) Jean de Gaufreteau, *Chronique bordelaise*, 2 vol., Bordeaux, 1877-1887. I, p.306. ゴーフルトーの『ボルドー年代記』については「その3」p.4以下を参照されたい。
- (24) Thomas Platter le jeune, *Description de Paris*. Traduction de l'allemand par L. Sieber. Achevée par MM. Weibel avec notes de E. Mareuse. Extrait des "Mémoires de la Société de l'Histoire de Paris et de l'Ile de France", Tome XXIII (1896).
- (25) "Déclaration de Valleran le Conte et sa compagnie à Benoist Petit et sa compagnie" du 16 janvier 1599. Cf. Deierkauf-Holsboer, *Vie d'Alexandre Hardy*, Appendice N° 7, pp.177-178.
- (26) Deierkauf-Holsboer の transcription (*Vie d'Alexandre Hardy*, p.178) では "XXIII^e jour" (23日) となっている。原資料で確認したところ、非常に読みにくくはあるが、"XXIII^e jour" (24日) と読むほうがよさそうである。なお、この後にも「23日」というのがあるが、こちらの方は transcription では "ledit jour de dimanche XXIII^e (sic) de ce present mois et an" となっており、また実際に原資料でも "XXIII^e" と記されている。念のため付け加えておくと、1599年1月23日は土曜日で、24日が日曜日だった。